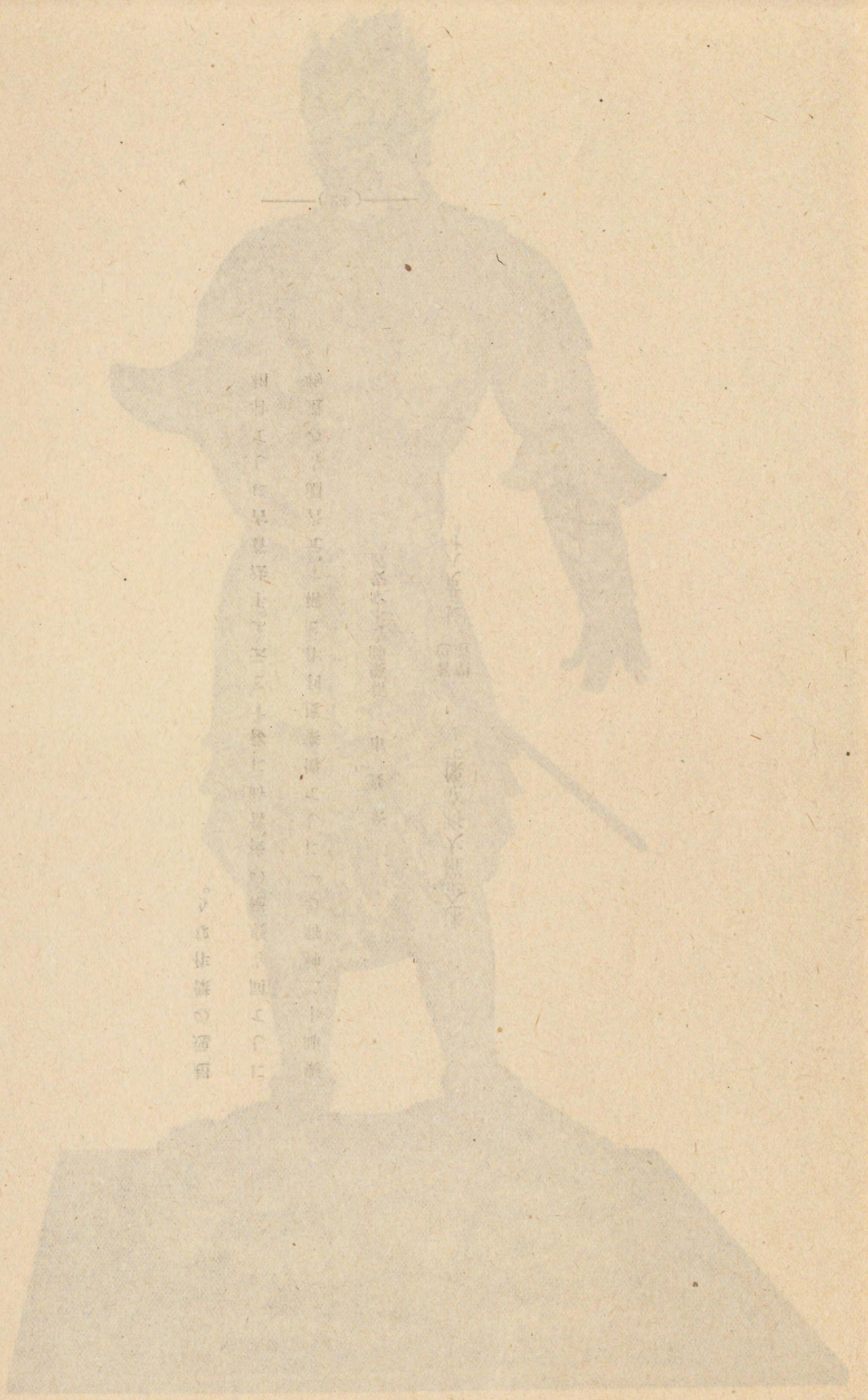
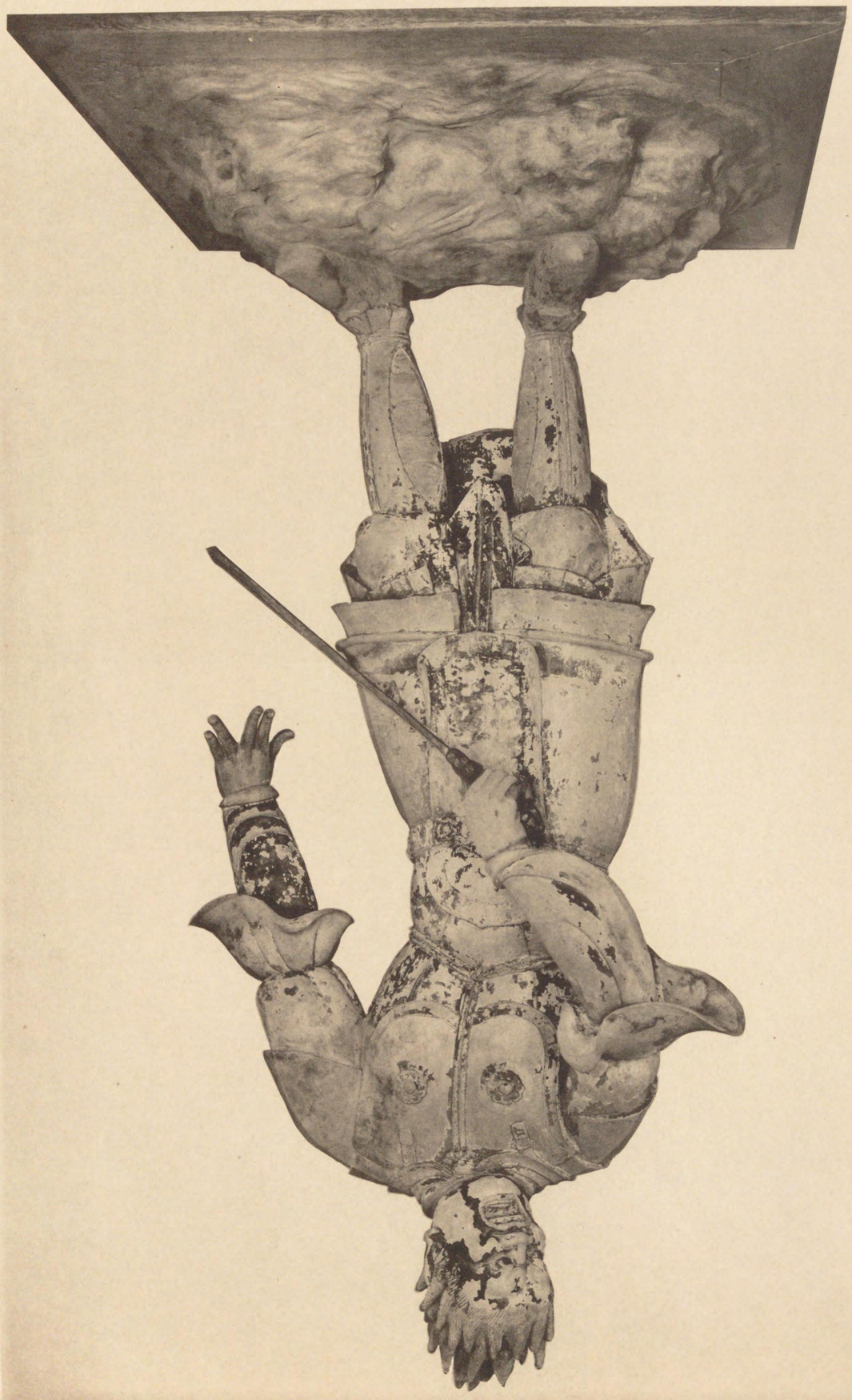


迷企羅大將立像。　塑造　長五尺八寸。
　　著色

奈良市　新藥師寺本堂安置。

藥師十二神將の一にして傳秦度利作と稱す、元岩淵寺の遺物にして同寺廢絶の後、當時に移すと云ふ。手法蒼古にして骨相超逸の傑作なり。

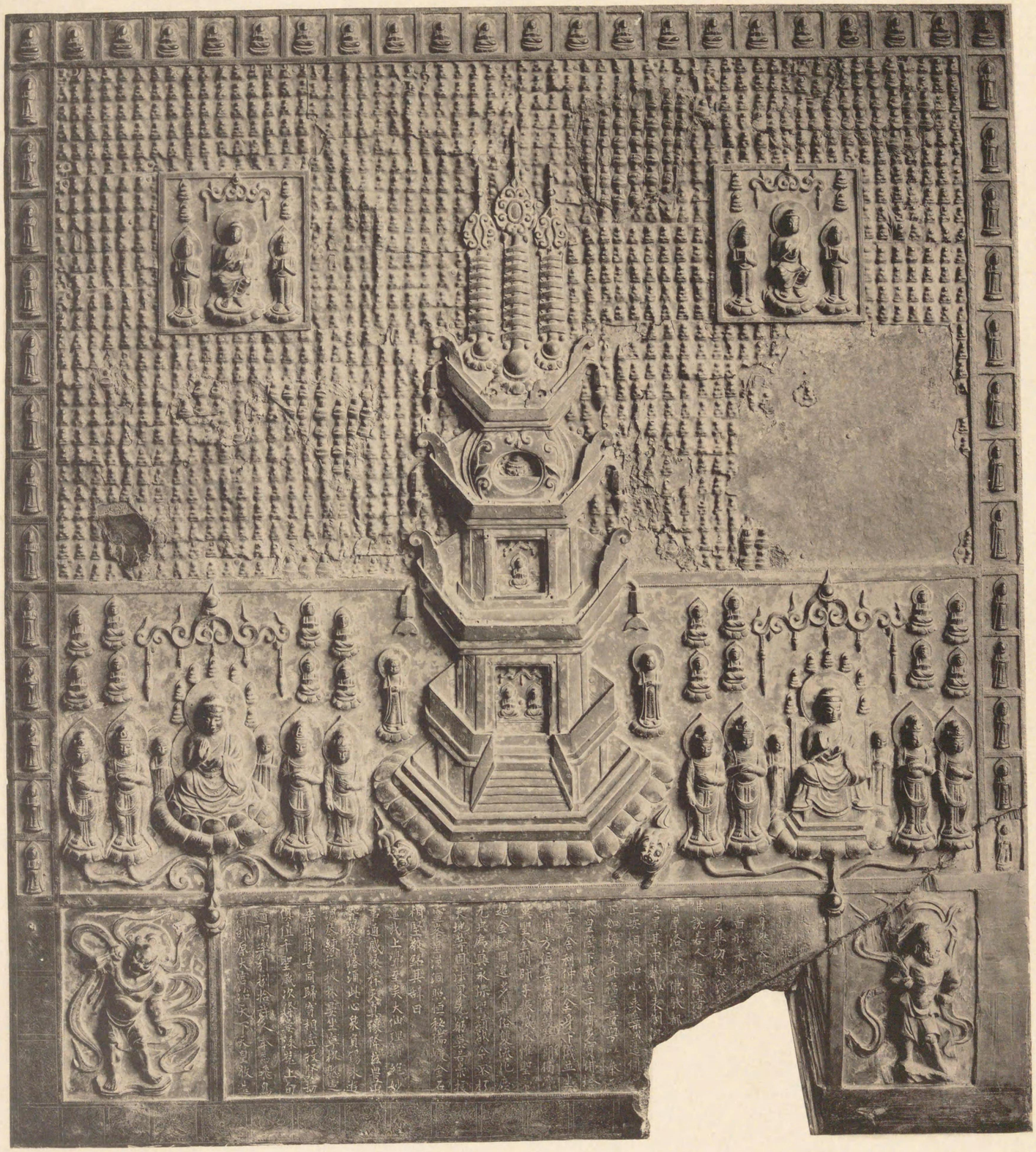


法華說相圖。

銅板　竪二尺七寸五分　幅二尺　厚六分

磯城郡初瀨町　長谷寺所藏。

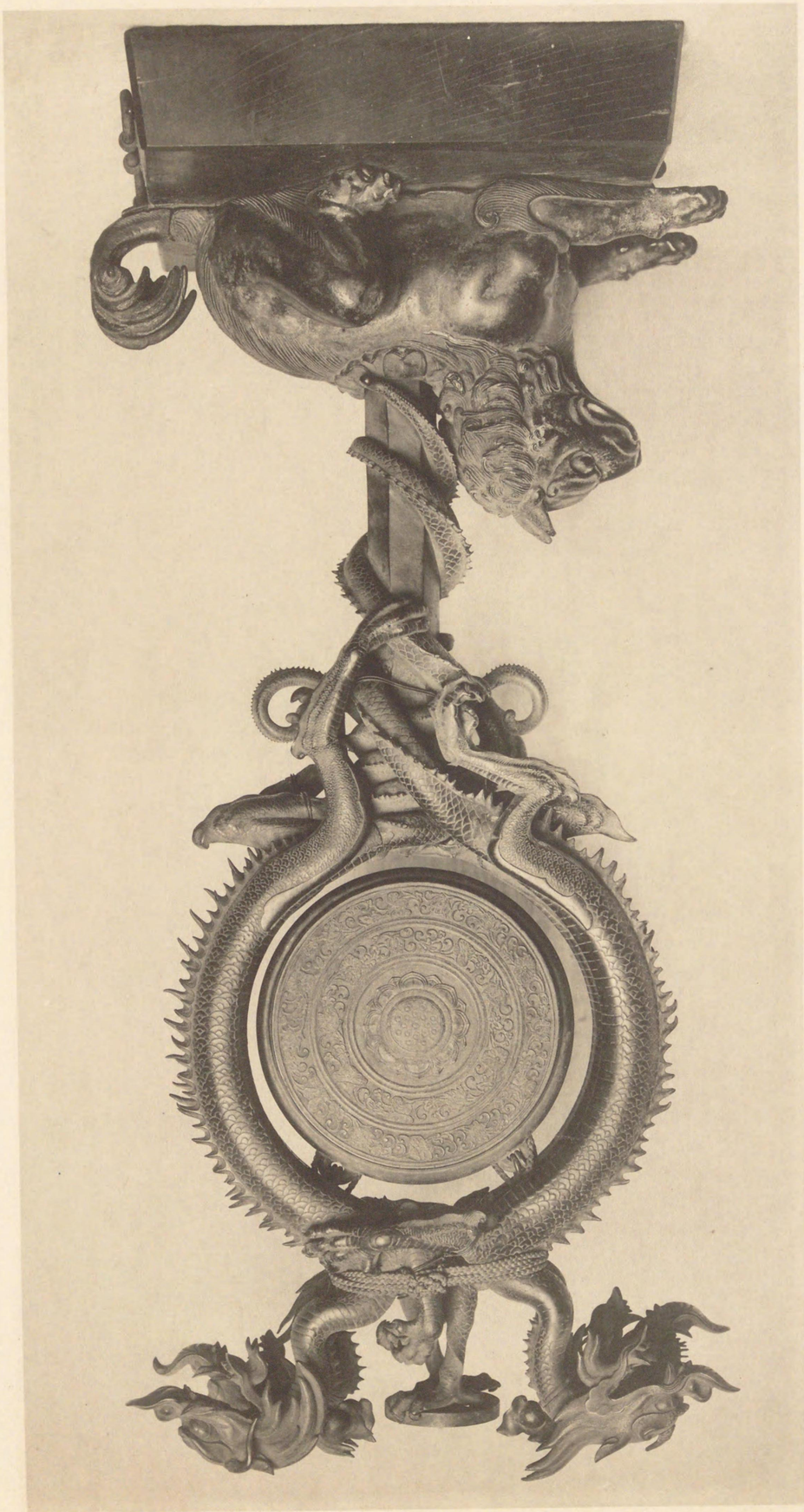
傳本長谷寺本尊千體釋迦板佛と稱す、中央に多寶塔、四邊に無數の諸菩薩を現出す、下段に銘文あり其の末に云ふ『歲次降婁漆菟上旬、道明率引捌拾許人、奉爲飛鳥清御原大宮治天下天皇敬造』按ずるに降婁は戌歲、漆菟は七月、飛鳥云云は　天武天皇を云ふ。されば本品は　天武天皇二戌歲七月道明の敬造なること明かなり。

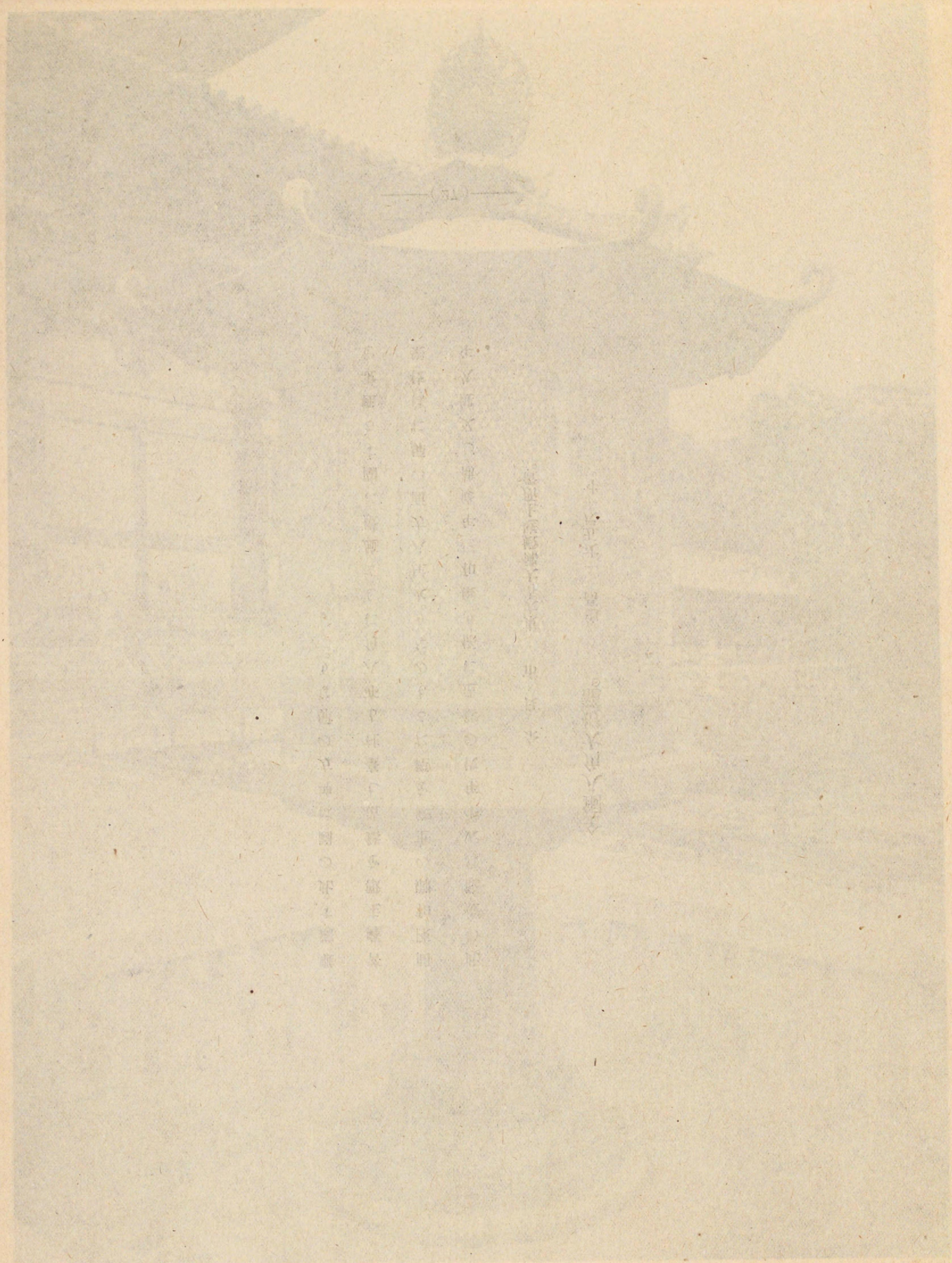


華原磬。　銅造　總高三尺二寸五分

奈良市興福寺所藏。

傳天平六年犍陀羅國王の貢獻する所にして問答師來朝の際舶齎すと言ふ。按ずるに華原は支那に於ける名石の產地たり其地の石を以て作れる磬なれば其佳名を取りて之に名けたるなるべし。其狀四龍一柱に繞纏し各背を屈し左右に向ひて磬緣を成す、其の中央に八寸の金鼓を吊す、柱下の獅子亦眞に迫りて鎔範精巧鑄工微妙絕品と稱すべし。古來泗濱浮磬と併び稱せらる。



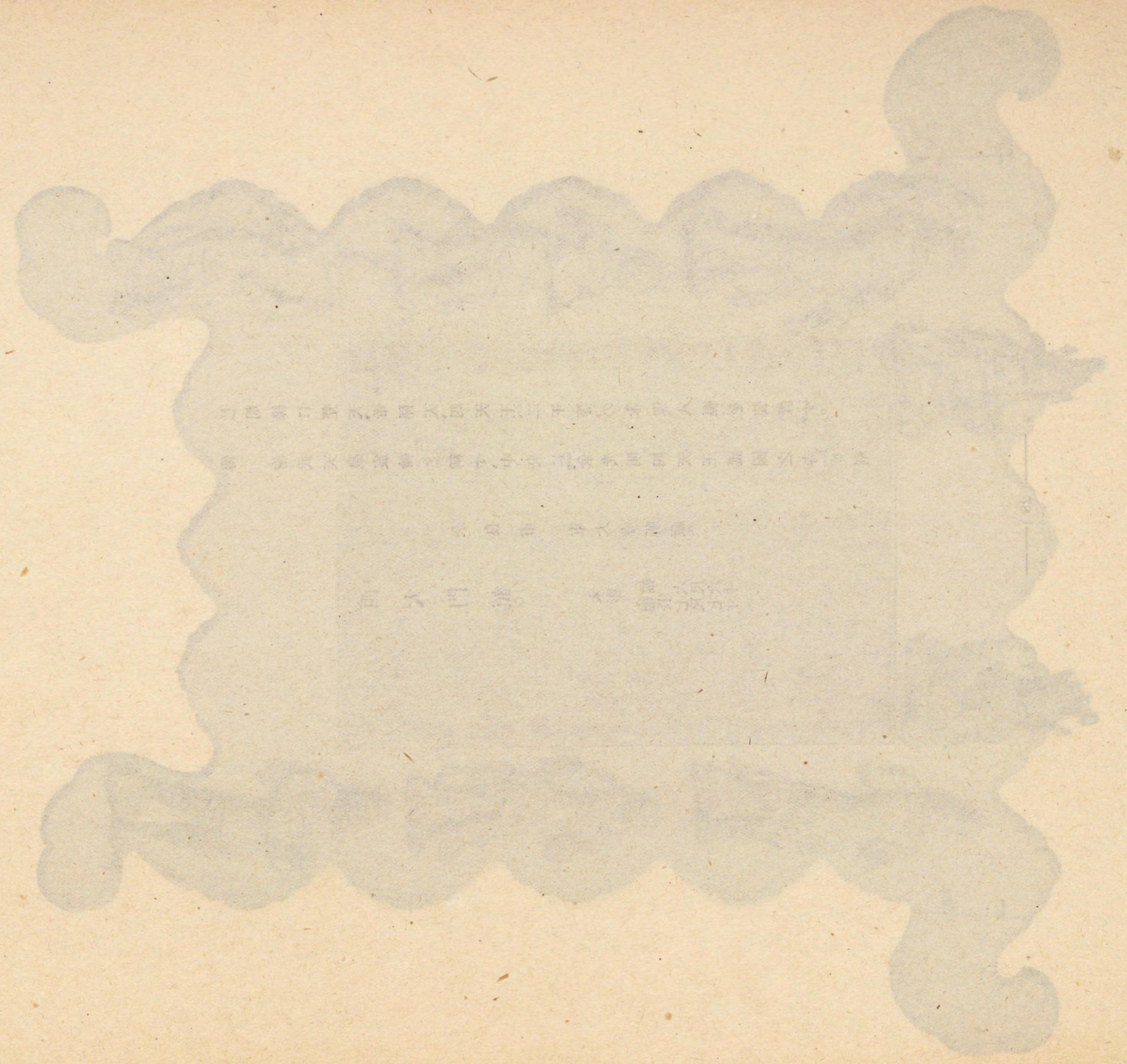


金銅八角大燈籠。

總高　一丈五尺一寸。

奈良市　東大寺大佛殿庭上所置。

此の燈籠は天平年代の鑄造に係り康和三年修補し又健久年間陳和卿の重修を經たるものなり。火屋八方面の扉には伎樂菩薩走獸を鑄造し臺柱も亦八角にして施燈に關する經說を雕鐫す此の圖は坤方の扉なり。

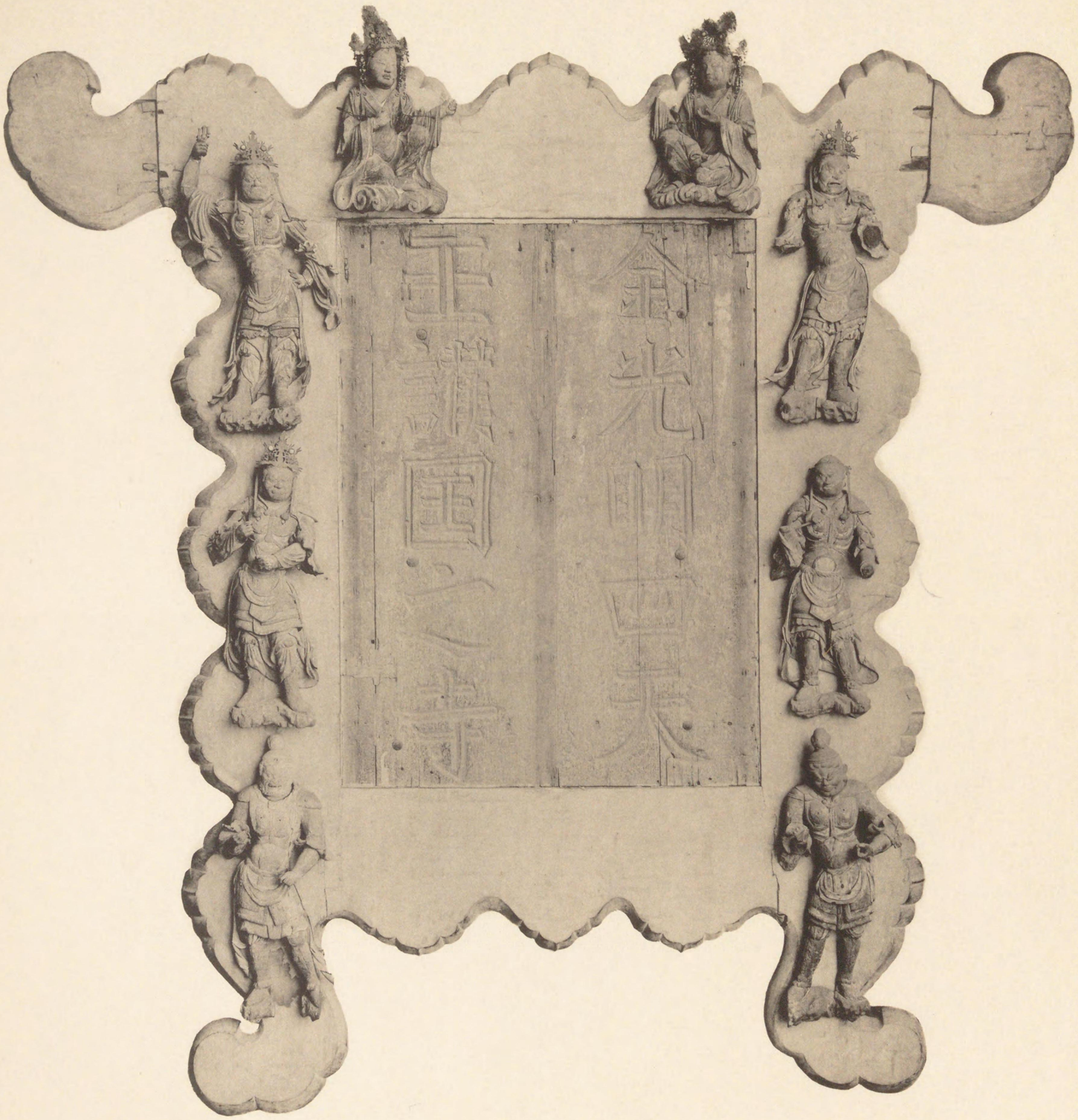


西大門額。

木彫　總長七尺七寸
　　幅　六尺六寸

奈良市　東大寺所藏。

傳　聖武天皇宸翰と稱す、中央に『金光明四天王護國之寺』と刻し周緣に梵天、帝釋天、四天王、二王等の木像八軀を裝置す。



吉祥天女像。

布本　竪一尺七寸五分
著色　幅一尺五分

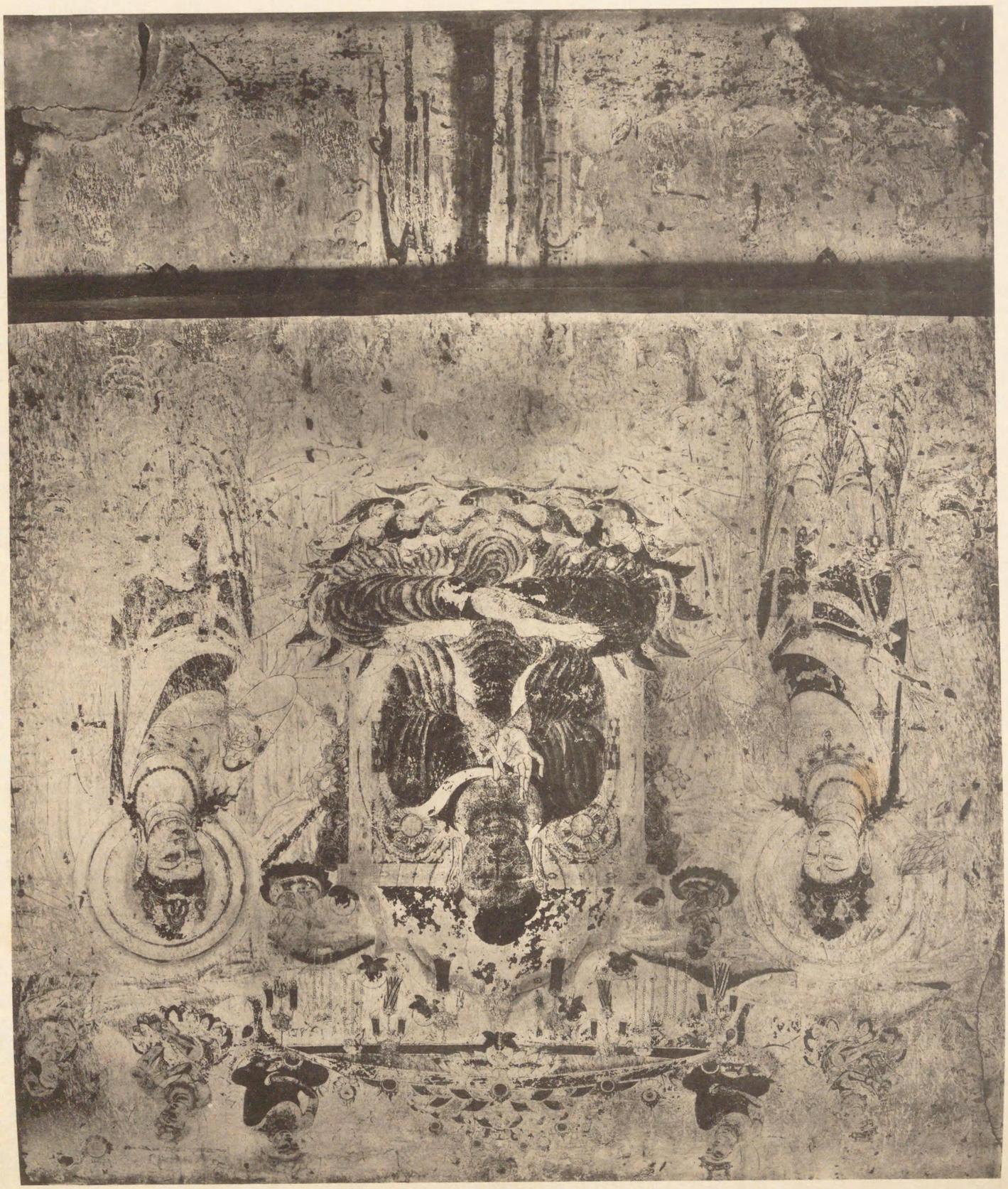
生駒郡都跡村大字西京　藥師寺所藏。

寶物緣起に『金岡が吉祥天女像是は靈驗あらたなる本尊なり。常は八幡の御殿の內に納置毎年正月一七日吉祥の行法あり其時ならでは拜し奉る事なし』とあり。されど其の面相及び服裝より觀察すれば蓋奈良時代の名匠の手に成りしものなるべし。

壁畫

生駒郡法隆寺村　法隆寺金堂内。

金堂内面の壁に畫けるもの。此の圖は其の西壁に畫く所にして阿彌陀の淨土を表はせり。其の全壁には下に胡粉を塗りて之に畫く其の圖樣西域方面の發堀品に酷似するものあり、非凡の大作にして暈染の妙言語に絶す。傳曇徵の筆と稱すれど時代は飛鳥の末より奈良の初め頃なるべし。



大毗婆沙論。

奈良市　東大寺所藏。　紙本墨書

所謂願經と稱するものにして光明皇后其父藤原不比等及び其母橘大夫人の冥福を祈らんが爲敬寫し給ふ所にして末に天平十二年五月一日記とせるせり。

大安寺伽藍緣起並流記資財帳。

添上郡五ヶ谷村大字菩提山　正暦寺所藏。　紙本墨書

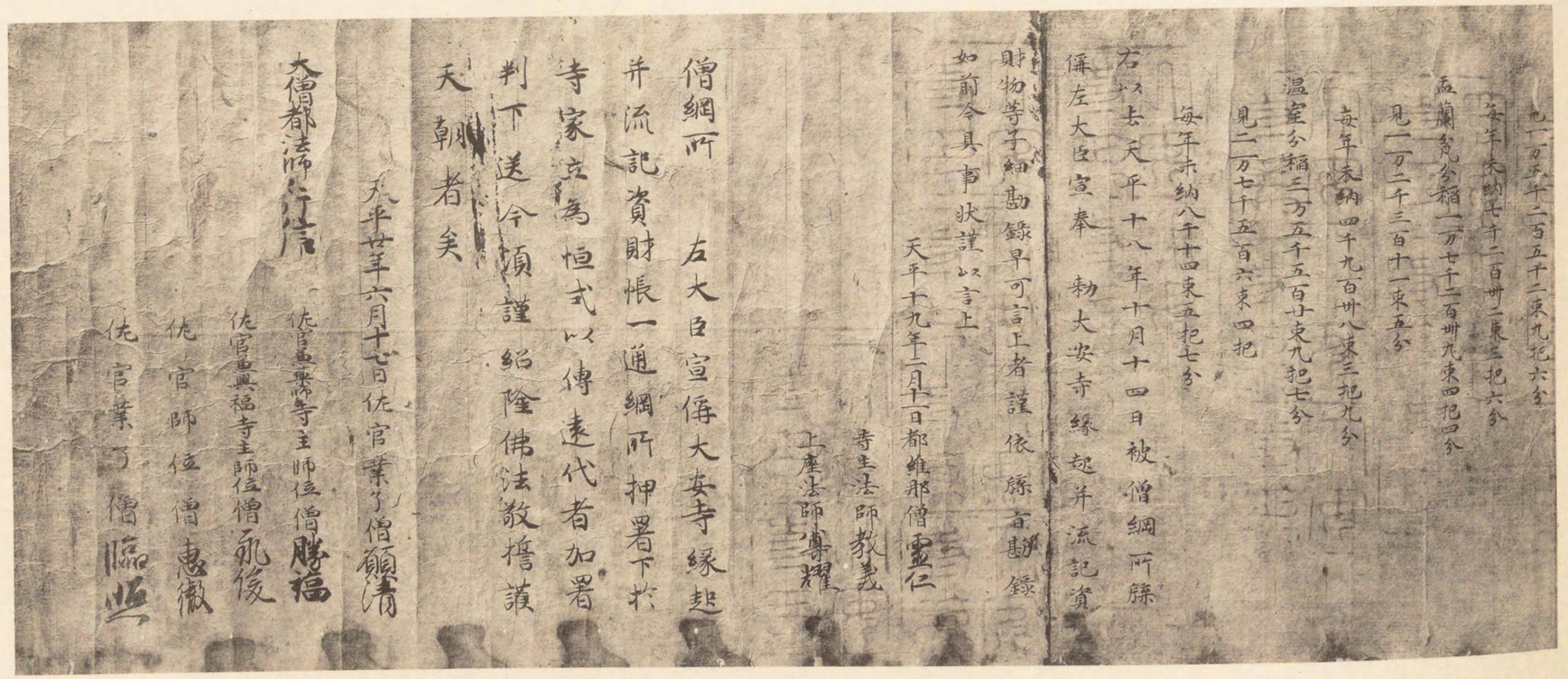
天平十九年の奥書あり、資財帳の正本は夙く散佚して孰れの寺にも傳ふるものなし、今僅に法隆寺と本元興寺との古鈔本の殘れるさへ最珍重すべきものなるを況して其正本依然として天平の故態を存し其舊觀を革めざるもの只此の帳あるのみ實に希世の珍と謂ふべし。

六處緣觸有餘處說名色緣觸餘處復說
二緣生觸如是三種有何差別答六處緣觸
顯觸所依謂顯一切外物和合必因於內內
法勝故但說所依故此經說六處緣觸名色
緣觸顯觸自性二緣生觸顯觸所依乃至緣
別復次六處緣觸說惡趣觸名色緣觸說欲
界人天觸二緣生觸說色無色界觸復次六
處經觸說不位觸名色緣觸說現在觸二緣
生觸說三和觸復次六處緣觸說觸位觸名
色緣觸說前位觸二緣生觸說後位觸問觸
受俱起何故此經但說觸緣受不說受緣觸
邪答二雖俱起而觸緣受非受緣觸隨順勝
故謂觸於受隨順力勝非受於觸如燈與明
雖復俱起而明因燈非燈因明此亦如是復
次此經中說不位緣起前位名觸後位名
受故不應責問何故前位諸蘊名觸後位諸蘊
名受邪答前位未能不別苦樂境界差別但
樂觸對種種境界故說為觸後位能了苦樂
境界避危就安故說為受復次前說觸受雖
復俱起而觸於受隨順力勝故觸為受因非
受為觸因因前果後其理必然不應為責問
何故觸順受勝非受順觸勝邪答要因觸境
方受違順非受違順方乃觸境故觸於受隨
順為勝非受於觸隨順為勝此依緣起理
趣而說不依相應俱有因說

說一切有部發智大毗婆沙論卷第廿三

皇后藤原氏光明子奉為
尊考贈正一位太政太臣府君尊妣贈
從一位橘氏大夫人敬寫一切經論及
律莊嚴既了伏願憑斯勝因奉資冥
助永庇菩提之樹長遊般若之津又
願上奉　聖朝恒迓福壽下
及寮采共盡忠節又光明子自發誓
言和濟沉淪勤除煩障妙窮諸法早
契菩提乃至傳燈無窮流布天下聞
名持卷獲福消災一切迷方會歸覺
路

天平十二年五月一日記



九一万五千二百五十二束九把六分
每年未納七千二百卅二束三把六分
盂蘭瓮分稻一万七千二百卅九束四把四分
見一万二千三百十一束五分
每年未納四千九百卅八束三把九分
溫室分稻三万五千五百廿束九把七分
見二万七千五百六束四把
每年未納八千十四束五把七分
右以去天平十八年十月十四日被僧綱所牒
偁左大臣宣奉　勅大安寺緣起并流記資
財物等子細勘錄早可言上者謹依牒旨勘錄
如前今具事狀謹以言上
天平十九年二月十一日都維那僧靈仁
寺主法師教義
上座法師尊耀

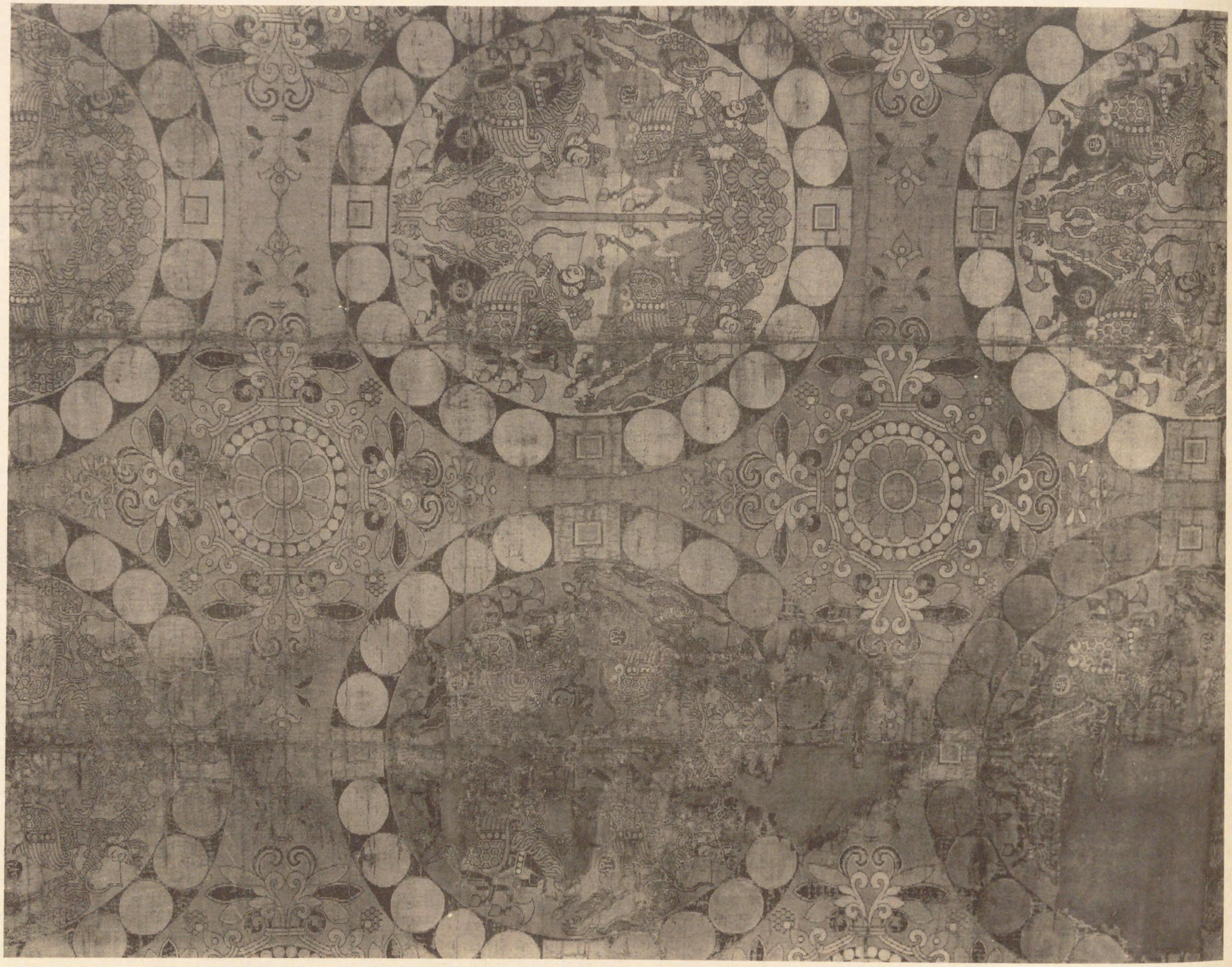
僧綱所　左大臣宣偁大安寺緣起
并流記資財帳一通綱所押署下於
寺家立為恒式以傳遠代者加署
判下送今須謹紹隆佛法敬誓護
天朝者矣
天平廿年六月十七日佐官業了僧願清
大僧都法師行信
佐官兼藥師寺主師位僧勝福
佐官兼興福寺主師位僧永俊
佐官師位僧惠徹
佐官業了僧臨照

獅狩模様錦。

縦 八尺一寸五分
横 四尺四寸五分

生駒郡法隆寺村　法隆寺所藏。

古今目錄抄に四天王歟文錦一丈許赤地とあるもの是なるべしといふ、因て四天王紋錦旗と稱す。傳へて　聖徳太子新羅征伐祈願の時佛前莊嚴用に織成せしめ給ふと云ふ。此の圖様は騎馬武者弓を彎りて獅子を射んとするの様なり。

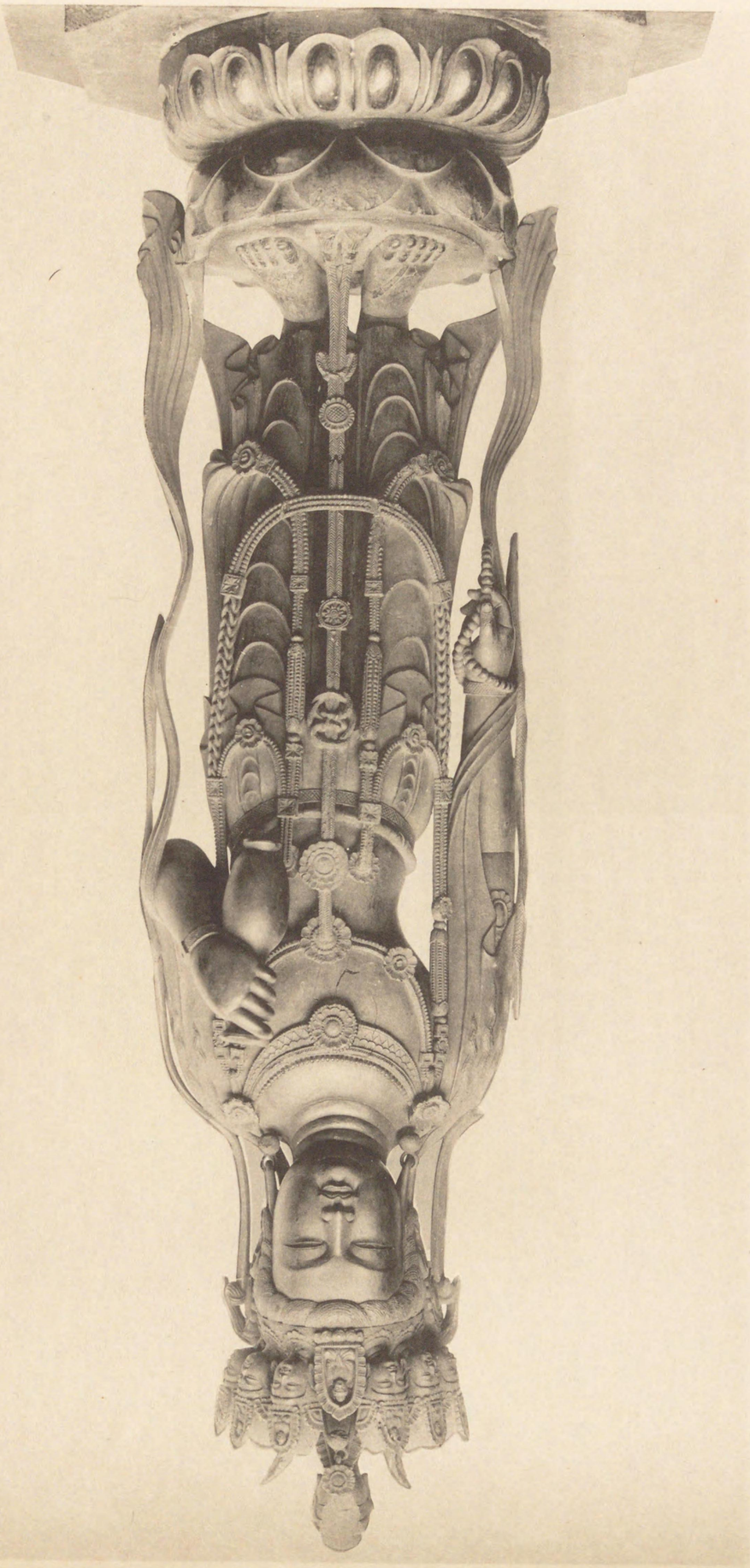


九面觀音立像。

本彫　長一尺二寸五分。

生駒郡法隆寺村　法隆寺所藏。

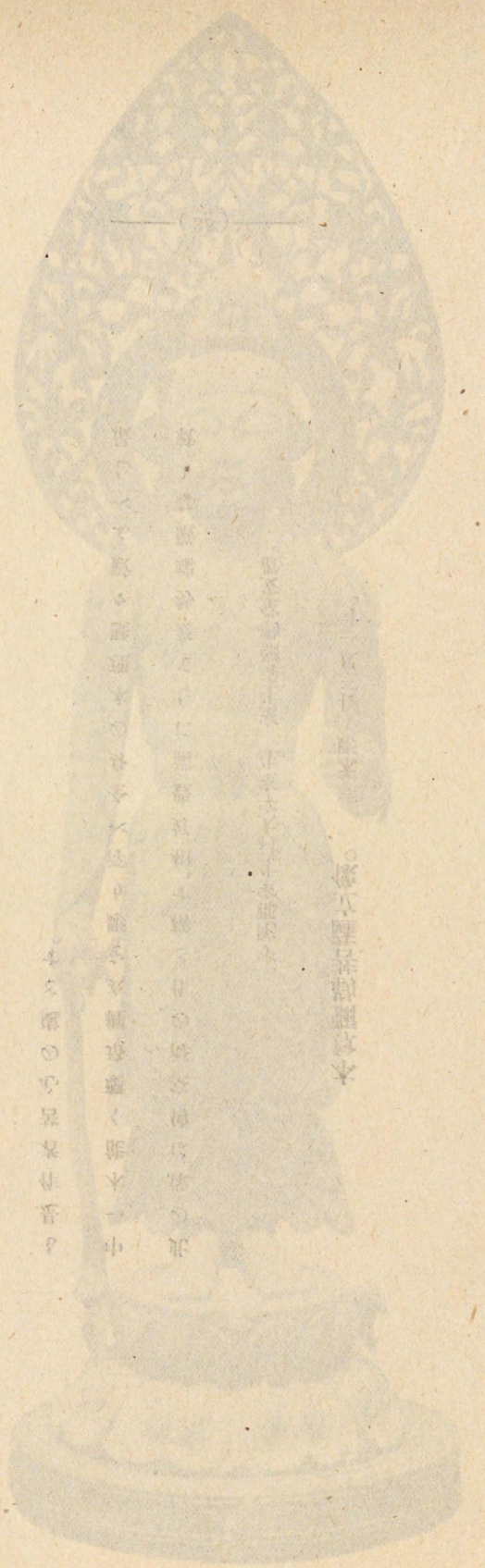
此の像面貌温麗衣袖流るゝが如く美云ふべからず。傳へ云ふ推古天皇三年四月淡路島に漂著せし樟木の一半を以て太子自ら觀音像を造り給ふこれ此の尊像なりと。古今目錄鈔に白檀にて造れる、無繼目之像也と見ねたり。



本尊十一面觀音立像。　木彫　高三尺二寸。

添上郡佐保村大字法華寺　法華寺本堂安置。

法華寺は　聖武天皇　天平十三年光明皇后の御願に由りて建立せられし處、此像は古來秘佛として尊崇せられ傳へて皇后の御影を模せるものなりといふ。姿勢優秀、刀法雋鋭、平安初期の傑作たり。



本尊彌勒菩薩立像。　木彫　長三尺一寸。

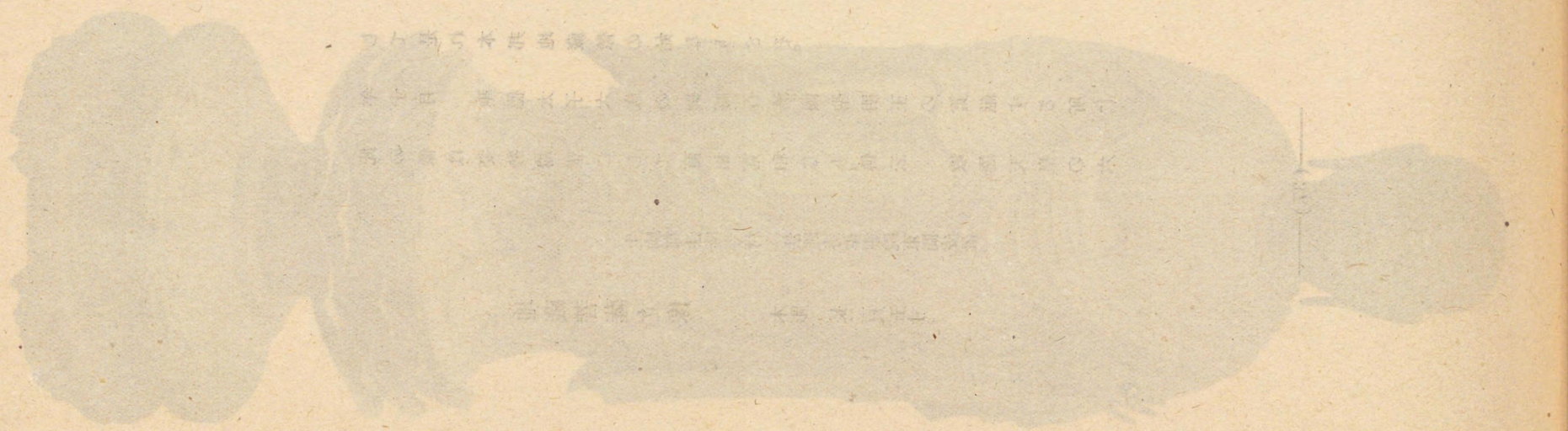
宇陀郡室生村大字室生　室生寺彌勒堂安置。

此の像は傳空海の作と稱す、相好豊滿にして姿勢端嚴なり。就中一木能く瓔珞纓衣を彫り浮べ全身の木理歴々數ふべし最も是作者苦心の處とす。

良辨僧正坐像。　木彫著色　長三尺一寸五分

奈良市　東大寺開山堂安置。

傳に自作と稱す堂内の西面に安置す、氣格儼然威容犯すべからず能く木彫の精を盡せり。



地藏菩薩立像。

木彫　長二尺五寸。

生駒郡法隆寺村　法隆寺聖靈院東間安置。

此の像は姿勢端雅にして面相寛和なり。傳云　敏達天皇の六年十月　聖徳太子六歳の御時百濟國聖明王の貢献する所にして是れ本邦地藏像の始なりとぞ。

聖德太子束帶座像。

傳沈香木造　長二尺八寸七分。

生駒郡法隆寺村　法隆寺聖靈院安置。

此の御像は太子三十五歳攝政の時の尊容にして傳御自作と稱す。正眼人を射て威容狎るべからず。其の體裏に岩座銅造觀世音立像法華勝曼維摩の三經を納置す。

中縣韓城芝川鎮出土

（一）（二）（三）（四）

（一）（二）（三）（四）

（一）（二）（三）（四）

僧形八幡神坐像。

仲姫命坐像。

木彫　長一尺四寸
著色　長一尺二寸三分

生駒郡都跡村大字西京　藥師寺所藏。

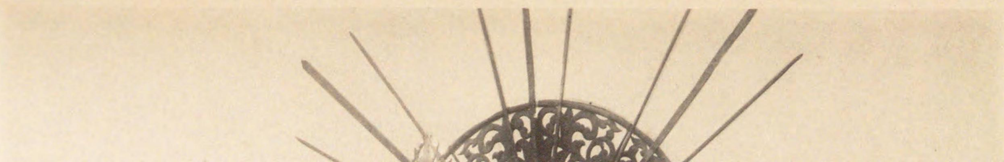
此の御像は往昔藥師寺鎭守八幡宮の御神體にして勸請の當初卽ち弘仁末期の作と稱す。尊容豐滿傳彩淡雅にして上代風俗史の資料たるべきは勿論幾多の神像中最精妙を極めたるものといふべし。

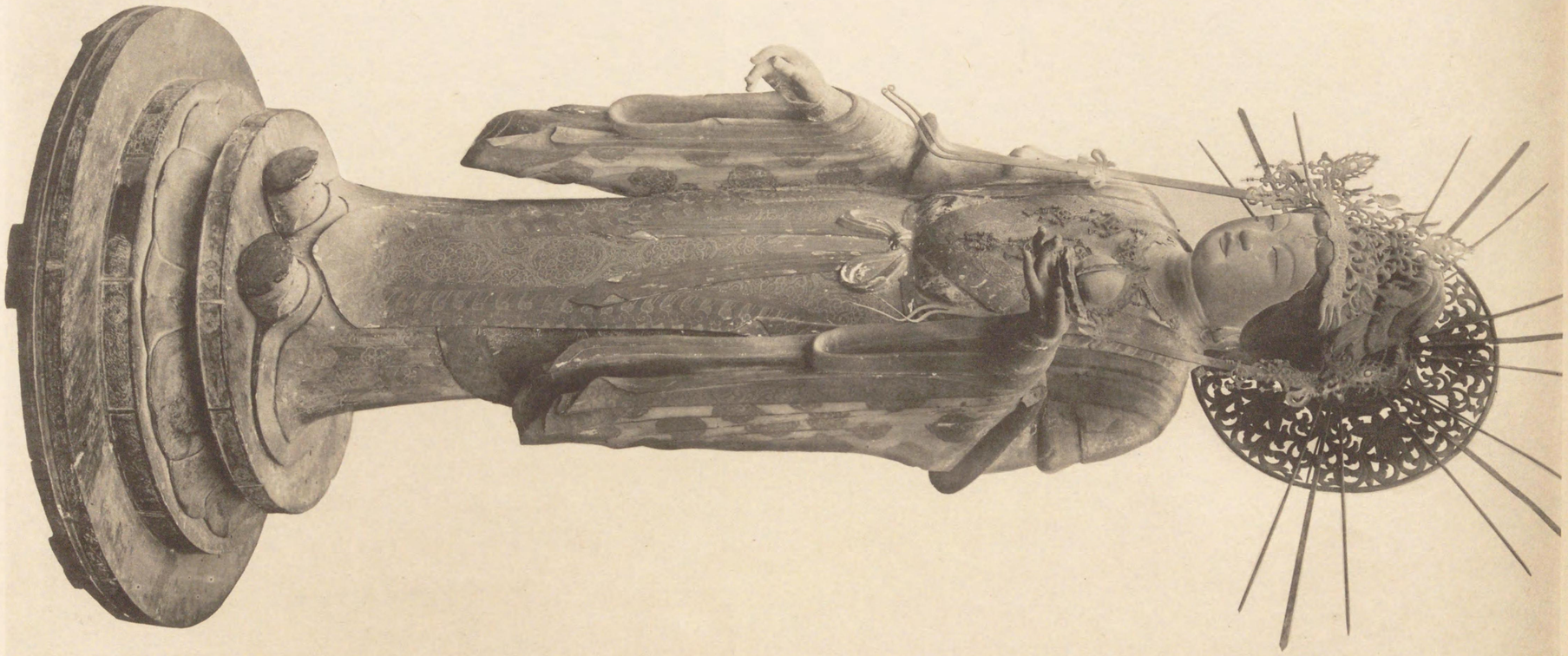
吉祥天立像。

木彫著色　長三尺九寸八分。

生駒郡法隆寺村　法隆寺金堂安置。

此の像は　孝謙天皇の御遺願に係る最勝會悔過の料として承暦二年正月彫始め十一月之に安置すと云ふ其の刀法温健にして着彩の美眼を眩す。



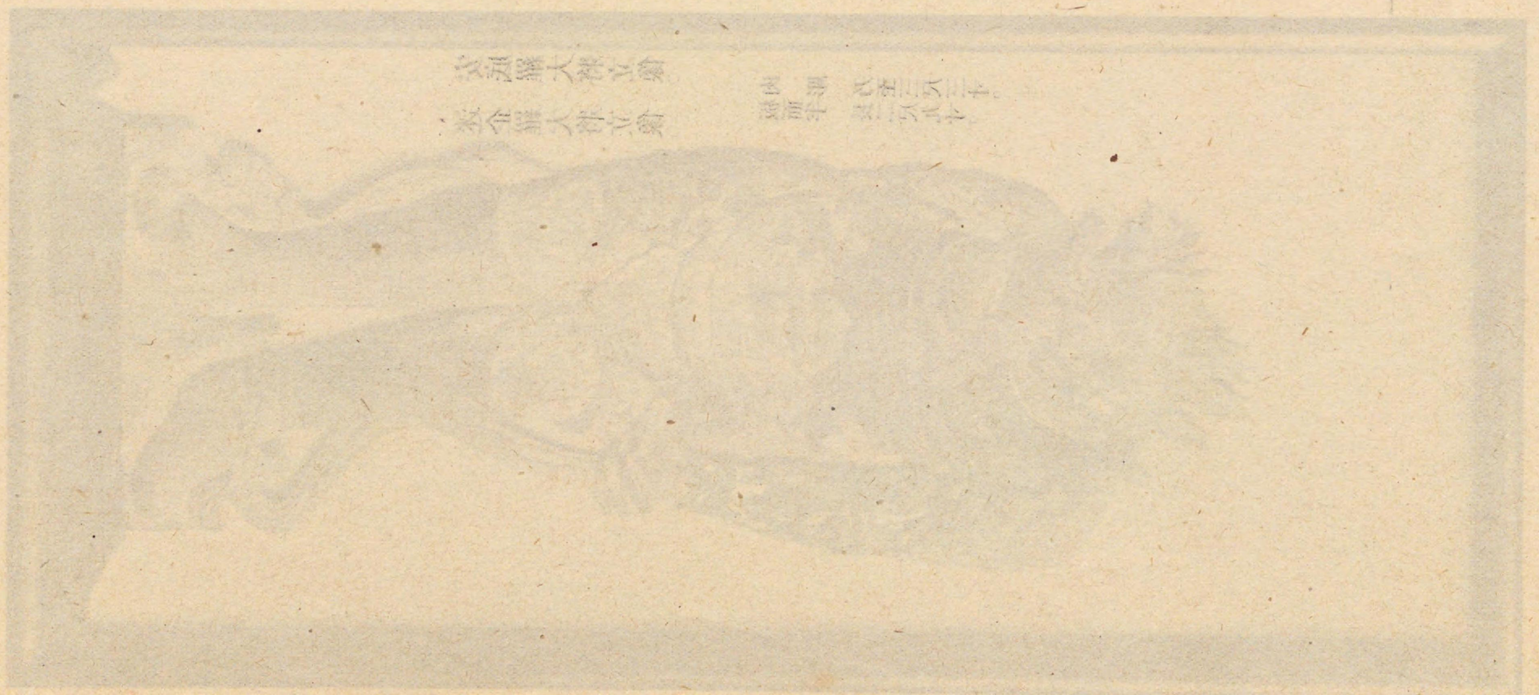


廣目天立像。

乾漆著色　長四尺五寸二分

奈良市　興福寺北圓堂安置。

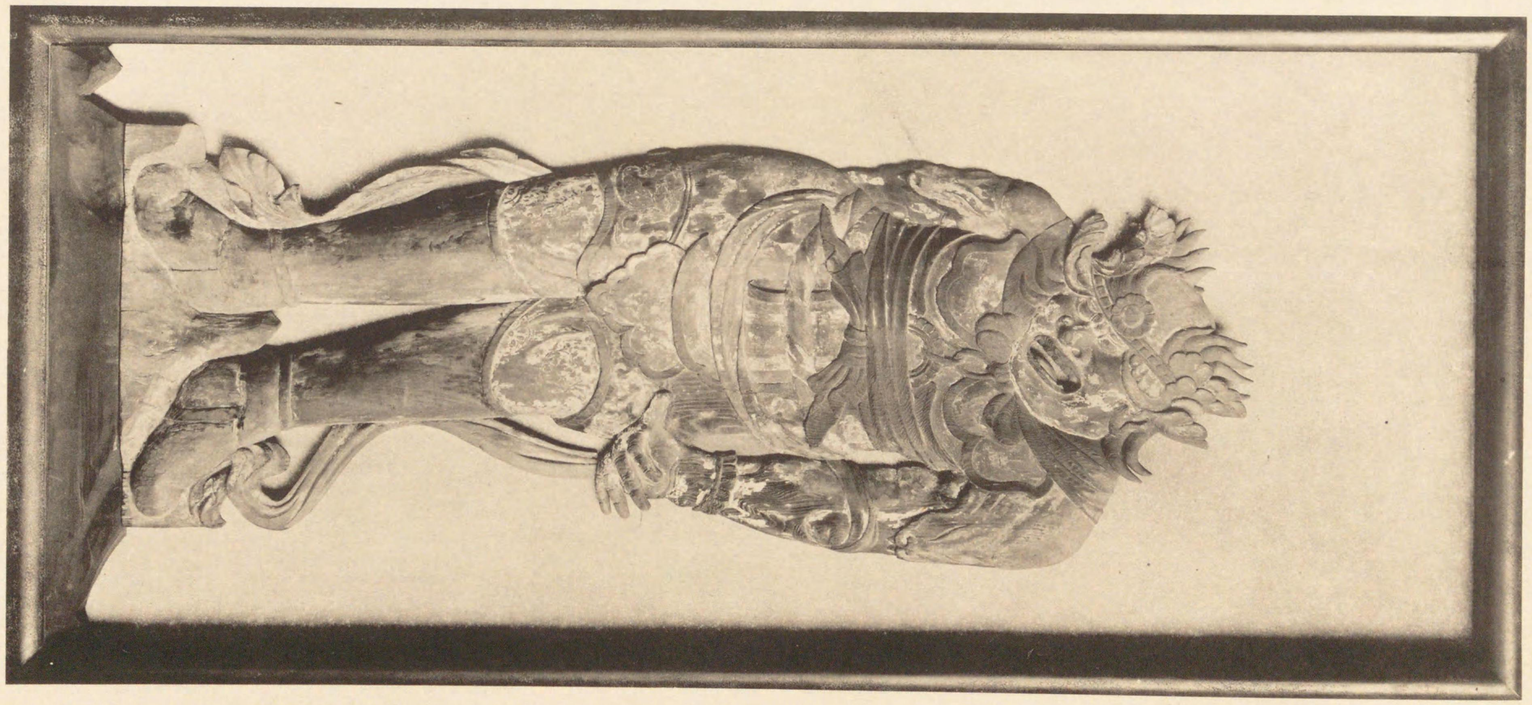
此の像は四天王の一にして大安寺の遺物なり延暦十年四月之を造立す。其の後破損せしにより興福寺の僧經玄手づから斧を取り弘安八年夏安居中に修覆する所なり。事は臺下の墨書に詳かなり。



迷企羅大將立像。　板面半肉彫　長二尺九寸。
安底羅大將立像。　　乃至三尺三寸。

奈良市　興福寺所藏。

此の二像は藥師如來隨侍十二神將の內にして傳弘法大師作と稱す。元南圓堂內に揭上せし所にして其形式奇古を極め鑿痕遒勁而かも板面半肉の彫像にして其技巧の非凡なる此れを措て復た他に覓むべからず。

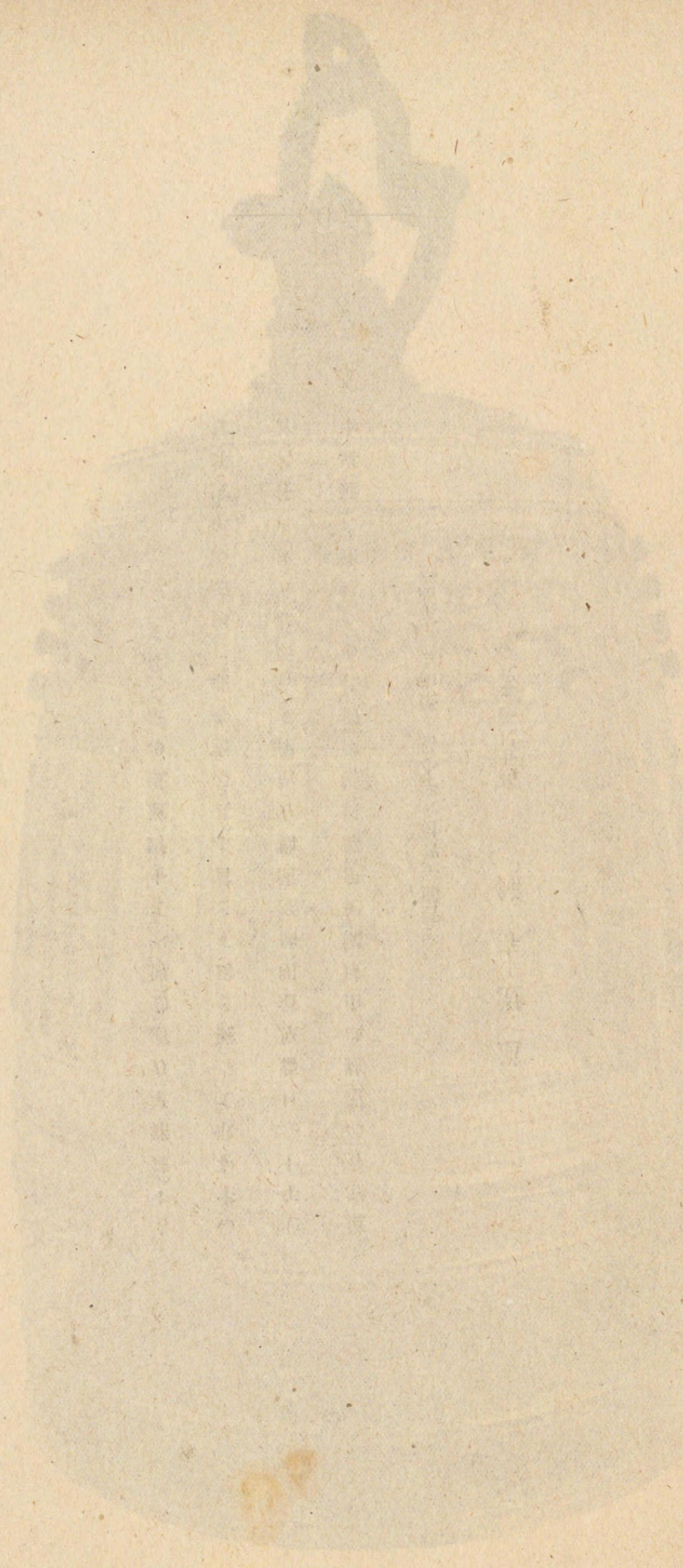


南圓堂燈籠扉。

奈良市　興福寺所藏。

銅造　竪一尺四寸八分。巾九寸。

此の燈籠は弘仁七年伊豫權守等其先考藤原内磨の爲に敬造する所なり。火屋六方面二扉既に逸亡し今僅かに四扉を存す。扉に銘文あり傳へて橘逸勢筆又僧空海の撰幷書とも云ふ。此の圖は最首の扉なり。



道澄寺　鐘。

高五尺徑三尺。

宇智郡宇智村大字小島　榮山寺鐘堂所懸。

道澄寺の遺跡は山城國紀伊郡斜橋の傍にあり。鐘銘に延喜十七年十一月藤原道明、橘澄清勠力造作する所なり。故に各名首の字を取て寺號と爲すと言ふ。其の廢寺並に移鐘の年代詳らず。鐘銘筆力遒勁。傳へて小野道風の筆となす。

阿彌陀如來像。

絹本　竪六尺一寸六分。
著色　幅四尺七寸四分。

添上郡佐保村大字法華寺　法華寺所藏。

此の畫像は三幅對の中尊なり。傳に『光明皇后御臨終の時御枕邊に掲げ給ふ、故に御臨終佛と稱す』と。容姿超凡慈眼衆生を觀古色靄々掬すべし。但、其手法當時の物とは見ねず、蓋平安中期に屬するものなるべし。

彌勒菩薩座像。　絹本著色

生駒郡北生駒村大字菜畑　寶山寺所藏。

此の畫像面貌豐滿着彩纖麗にして頗美なり。筆者兆殿司と傳ふれども其布置描法を鑑すれば蓋平安末に屬するものなるべし。

慈恩大師像。

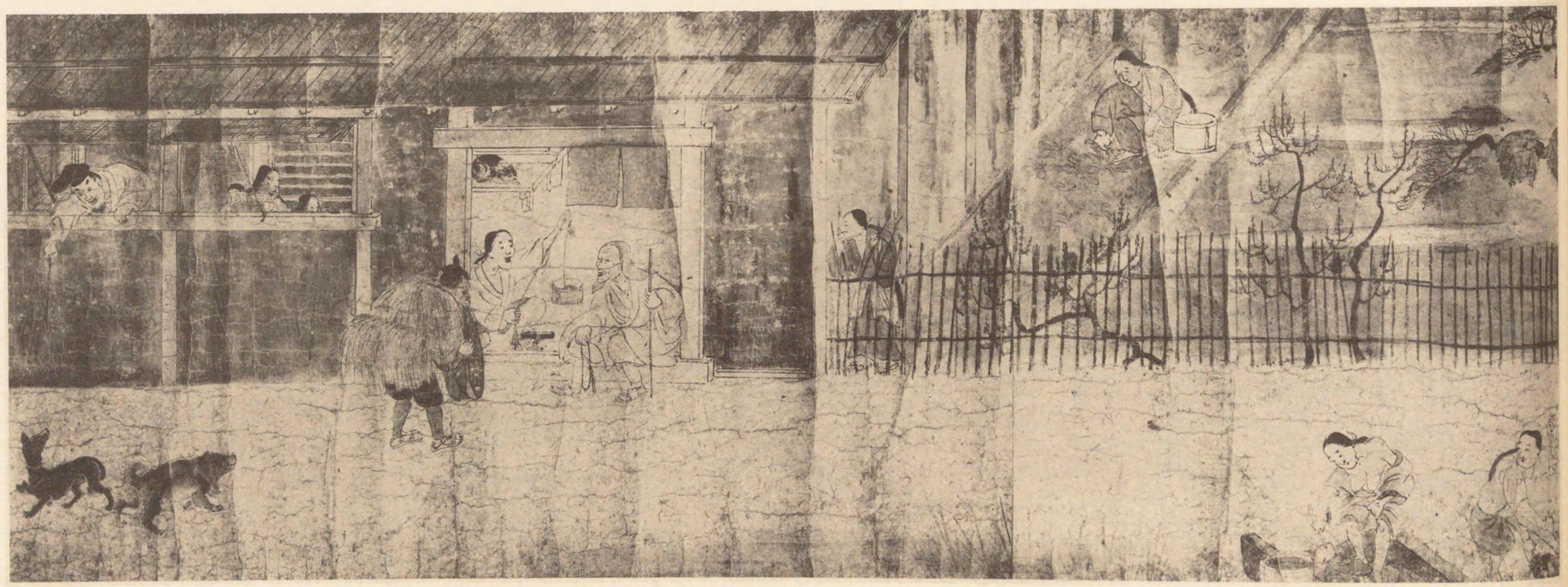
絹本
着色

生駒郡都跡村大字西京　藥師寺所藏。

大師は法相宗の開祖にして唐高宗の時の人なり。此の畫像は傳唐畫、讃小野道風筆と云ふされど畫は本邦人の手法なること疑ひなく讃詞は道風の筆にはあらざるべきも其時代に近きものなるべし。

志貴山繪緣起。

紙本著色

生駒郡平群村大字信貴畑　朝護孫子寺所藏。

道の幸に「書は鳥羽僧正の筆いかにも疑なく見ゑ侍り詞は成行卿といへども時代たがひぬればあらぬなるべし」と言へり。鳥羽僧正名は覺猷、保延六年寂す頗戲書に達す。